



— 第 630 号 —
 新潟市中央区浜浦町1の1
 浜浦小学校
 電話 (025) 266-3181
<http://www.hamaura-city-niigata.ed.jp/>

子どもは風の子、か

校長 小林 圭 一

夏休みが明けた日、私は子どもたちを出迎えようと玄関に向かう。ガラス戸の向こうに、両手いっぱい荷物を抱える子どもたちが見える。

「ここはひとつ、満面の笑みで迎えよう。「元気があったかい？」と声も掛けるとしよう。「〇〇へ行ったよ！」と息せき切つて話してくれる子もいるだろう。素敵な時間になりそうだと妄想を膨らませつつ、私は玄関の鍵を開ける。

一気に、そして、なかなかの勢いで子どもたちが入ってくる。私は子どもたちに押し込まれながら、満面の笑みで挨拶する。「おはよう！」

ところが、返事はない。時折返ってくるのも、聞き取れないほどの小さい声ばかり。どうした？ 私は困惑しつつ、それでも声をかける。「おはよう！」

しかし、変わりはない。子どもたちは、相変わらず黙ったまま、なかなかの勢いで玄関に入ってくるばかりだ。

なんだなんだ、せっかく再会できたというのに、みんな不愛想じゃないか。休みの終わりが悲しいのか、登校中に嫌なことがあったのか、それとも私の満面の笑みがいけないのか。いったいどうしたのだ。休み前と違う様子に、私は戸惑っている。少々腹も立ってきた。

◆ 五分後、理由が分かった。

暑いのだ。暑くて暑くて消耗し、声を出す余裕などないのだ。わずか五分、私はただその場に立っていただけなのに、すっかり口へ口になり、このことに気づいた。

両手に荷物を抱えて十分も二十分も歩き、さらに陽の下で開錠を待った子どもたち。そりゃ声も出ないだろうし、日陰を求めて押し寄せるわけだ。

みんな、がんばって登校してきたのに、ごめんさい。一方的に腹まで立てるとは何事か。反省した私は、翌朝から「おはよう」に続けて、「えらいなあ」「よく来たなあ」と付け加え始めた。

後日、気象庁のデータで調べたところ、この時の気温は、三一・三度。まだ朝八時なのに…。ため息が出る。

◆ 令和の今でも、学校は暑さ寒さを克服したとは言えない。冬は冬で底冷えのする体育館での活動もあるし、大雪の中を登校する日だってある。下校中にゲリラ豪雨にあうこともあれば、最近はいノシシへの警戒まで求められるのだ。

「子どもは風の子」なんて一言で、無邪気に子どもを野放しにすることが、いつの間にかできなくなっている。子どもたちに安全で心地良い環境を保障するため、今一度大人の知恵を集集することが必要かと思う。